

新たな認知機能評価スケール NoAH の開発について発表

2017年09月25日

9月23日(土)に岡山コンベンションセンターにて開催された第7回日本認知症予防学会 学術集会において、株式会社サムライトにて開発した新たな認知機能評価スケール『NoAH(Nouwaka Assessment on Hierarchy)』に関して、下記のような発表を行いました。

『iPad を利用した認知機能評価スケールの開発』

光岡 眞里 1) 藤田 徹郎 1) 田上 暢頭 1) 若松 直樹 2)

1) 株式会社サムライト 2) 新潟リハビリテーション大学医療学部リハビリテーション学科リハビリテーション心理学専攻

最近では認知機能の低下を早期に発見することや、認知症を予防することを目的としたトレーニングが注目されてきており、こうしたトレーニングを継続していくにあたって『認知機能がどう変化をしているかを捉えたい』という需要も少なくありません。このような評価の際に MMSE など既存の認知機能評価スケールを使用した場合、健常に近い群においては満点に偏る傾向にあり、実用に適さない面も見られます。そこで、株式会社サムライトでは早期発見や認知症予防トレーニングの効果判定を可能にするために、より鋭敏な評価システム『NoAH』を開発しました。

実用化に先立ち、平均年齢 68.5 歳 ± 8.2 歳の健常群 36 名、平均年齢 88.8 歳 ± 5.3 歳の軽度から重度までの認知症群 28 名、合計 64 名の被検者に対し、MMSE と NoAH を用いて実証実験を行いました。その結果、MMSE と NoAH の点数の間には相関係数 $r=0.95$ 、 $p<.01$ と有意な相関が確認されました。かつ、MMSE で満点だった被験者においても、NoAH では平均得点 95.8 点 ± 3.2 点で、89.5 点 ~ 100 点に分布する範囲で点数が低い群が存在するなど、MMSE に比べて NoAH では認知機能の差異を細かく表現できることが伺える結果となりました。

このことは、NoAH を用いることにより健常群の認知機能低下のスクリーニングや、予防トレーニングの詳細な効果判定を、効果的に行うことが可能となることを示唆すると同時に、iPad などのタブレット端末を利用することにより、容易に精度の高い認知機能評価が可能になることに期待を生むこととなりました。

既に NoAH は株式会社サムライトが販売している『脳若ケア』に搭載されています。今後は、重度の認知症の方の状態を鋭敏に捉えるなど、更に発展した認知機能評価スケールへと発展させていくことを検討しています。



<本件に関するお問い合わせ先>

株式会社サムライト 事業統括部 サービス・プロダクト開発グループ 藤田(フジタ)・田上(タガミ)

TEL : 092-852-5252 FAX : 092-852-5255